

びわこの 考湖学

1

飛鳥であり大津であったの
です。

7世紀になると飛鳥、難
波、大津に宮が置かれてい
ます。渡来系集団や港とい
う共通要素があることに

気づきます。あまり広く知
られていませんが、天智天
皇が大津から、さうに宮を
あつたと考えられるので

す。

百濟遺民が居住していま
す。

移そうともくろんだ場所が
あります。そこは、当時
「置連」(現在の滋賀県蒲
生郡日野町必佐)と呼ばれ
た場所で、多くの亡命した

か。

例えばこれらの氏族の中

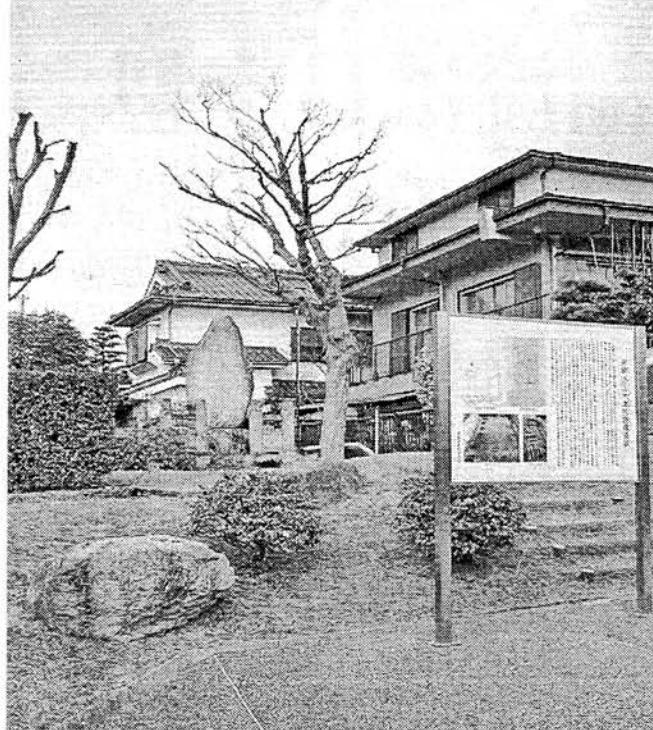
には「曰佐」という仕事に

割を担っていたのでしょうか

く、特長を生かして列島と

半島の架け橋的な役割を担
っていました。

大津遷都



大津宮跡。現在は住宅や公園になっている
—大津市錦織

日本列島に住まいながら
では、彼らはどの様な役
割を担っていたのでしょうか
と、ついで、當時の王権と
就いていた人が多數知られ
ています。「曰佐」とは通
訳のことなのです。彼らは
には「曰佐」という仕事に
割を担っていたのでしょうか
く、特長を生かして列島と
半島の架け橋的な役割を担
っていました。

また、彼ら渡来系集団は
文字の使用にたけており、
當時日本列島では知りえな
い知識や技術を持っていました。
長らく分裂していた中国
が隋(589~619)、
さらに唐(618~907)によつて統一されるこ
とにより、東アジア世界は
新しい局面を迎えていまし
た。当然のことながら海外
事情を注視し、素早く対応
する必要があったのでしょ
う。

激動の7世紀、中大兄皇子は海外事情通でもある渡
来系集団と密接な関係をもつていたことは、想像に難
くありません。大津への遷都は、このような事情を背
景にしていました。

なぜ渡来系集団が琵琶湖
のほとり、大津に居住して
いたかについては、次回
降に明らかにしていくこ
とします。

(滋賀県文化財保護協会
畠中英二)



大津宮 白村江での敗戦後、中大兄皇子が667年に飛鳥から遷した宮。中大兄皇子は大津宮で即位し、天智天皇となる。671年に天智天皇が没し、翌年の壬申の乱で天智天皇の後継者・大友皇子が大海人皇子(後の天武天皇)に敗れ、再び飛鳥に遷都。近江大津宮は廃された。

古代屈指の政変である乙巳の変(大化の革新)の後のこと、友好国であった百濟が唐・新羅連合軍によつて滅ぼされました。当時の政府首班であった中大兄皇子(後の天智天皇)は、百濟復興を支援するために朝鮮半島へと出兵しました。しかし、663年の白村江の戦いにおいて倭・百濟連合軍は唐・新羅連合軍に惨敗し、対外的な脅威を抱えることになったのです。北部九州から近畿にかけての瀬戸内海沿岸に多数の山城を築くなど、国防を充実させる中で、667年3月に飛鳥から大津へと宮を遷し、中大兄皇子は即位して天智天皇となります。ただし、この遷都の理由は諸説あり、明らかではありません。

しかし、宮の周辺においては幾つかの場所に分かれて行ってきた考古学的調査結果として、その一つが

渡来人あるとこう宮都あり